



# ピッポ新聞

2005

9

No.201

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500円  
編集・発行 伊藤俊男

## ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3  
TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>  
Email [pippo@diana.dti.ne.jp](mailto:pippo@diana.dti.ne.jp)

### 必要なのは基礎の構築と想像力の自由な羽ばたき

最近この国の人びとの「ものごと」に対する反応を見ていて、ものごとを判断するには基礎と想像力というものがいかに大切であるかを痛感しました。ものの見方、考え方(世界観や価値観)の基礎が自らの内部にしっかりと構築され、その上で想像力を自由に羽ばたかせることの訓練ができていれば、どのような状況であれ、それぞれがその判断を大きく誤ることなどないのだと思います。(思わず訓練と書いてしまいました)が、想像力は、幼いときから育むもので訓練や調教ではダメなのですがね！

基礎がその人の内部にしっかりと構築されているならば、たとえ、政治家が如何に三百代言を駆使しようが、また、メディアがあたかも批判しているように見せかけてその実、時の権力に迎合しようが、さらに、自分たちの都合のいい評論家を登場させて都合のいいことを喋らせて世論を権力側に誘導しようと思図しようが、誤魔化されることなどないでしょう。ものごとの基礎をしっかりと自らの内部に構築さえしているならば！

残念なことに、「この国の大人たち(とりわけエリートといわれる人種)は、基礎の上に想像力を働かせるといことが、世界中で一番苦手な人種ではないでしょうか。なぜ、ぼくはここであえて「とりわけエリートといわれる人種」と

強調するのかと言えば、この衆院選挙に「刺客？」として立候補した、財務官僚の女性候補の弁を聞いていてその意を強くしたからです。

いわく「官僚のトップの総理大臣にお仕えして(おい！おまえのお仕えしているのは、この国の市民だぞ！)、そのトップから要請されたことは光栄です。小泉総理の為に全力を尽くしたい」。また別の、国連軍縮特別大使とやらを勤めたという女性候補も「小泉総理のために郵政改革に全力で取り組みたい」というのです。

この二人に決定的に欠落しているのは、自分が一人の人間としてどのような政治を志すのかという当然政治家として語らなければいけない哲学が皆無であること、さらに、「市民のため」という視点です！

言うまでもありませんが、ぼくがここで言う基礎とは、優れた人間性の事であって、権力に奉仕するための知識のことではありません。

おそらく彼女たちは、そんな視点など最初から持ち合わせてはいないのでしょう。こんな奴らが官僚や特別大使であった事が誤りなのです。おそらくこの女性は自分は公僕(＝市民に奉仕する存在)であるという認識などは持ち合わせてないで、ただ政府の中枢で仕事を自分たちは選ばれた人間であるという優越感だけが強いのだと思います。

だからこそ、小泉は彼女たちのプライドをくすぐり、自分に有利になるよう政治的に利用する

だけです。これだったら野田聖子の方が余程哲学を持った政治家だとぼくは思うな！

マスメディアは、こんな奴らがある意味で誇らしげに立候補することに一言の批判も加えず、いやむしろ「刺客、刺客」と面白おかしく大々的に取りあげることによって、この選挙で本当に問われなければいけない問題を逸らすことを、意図的にやっているのではないのでしょうか？

**ぼくはそついう疑問を抱いています！**

基礎ということでは言うならば、私たちは中学の時に習ったはずで、この国の民主主義制度は、三権分立であり、国権の最高機関は（政府＝首相ではなく）国会であることや、議院内閣制であることを。そして何よりも、主権在民であることを。

これはいかなる法律にも優先する国の基本法である憲法の根幹の一つをなすのは言うまでもありません。これに照らして、自らが最重要と位置づけた法律案が国民の代表で構成される参院で否決されたのですから、今回の小泉首相のとるべき道は、内閣を総辞職することであって、衆院を強引に解散することではないのです。

マスメディアは、このことについて疑問すら投げかけなかったのはどうしたわけでしょう。しかも、世論調査によれば、小泉内閣の支持率はアップし、あろうことか自民党支持さえアップしたという。基礎がしっかりしていれば、どうすべきかを中学生で

も判断できる事柄を、マスメディアに踊らされたこの国の大人たちが正しく判断できない結果が、小泉内閣支持率アップということではないのでしょうか？

これを、基礎がしっかり構築されていないからだと考えるのは誤りでしょうか？

余談ですが、ぼくは今回一番みっともないのが郵政民営化法案に対して採決を棄権した議員たちだと思います。明確な反対投票もせず、どっちつかず（様子見）でいて、解散になったら党の幹部に脅かされて、公認を得るため今度は賛成の誓約を党に入れて公認して貰うとは、昔で言えば、転向である。言葉を換えて言えば自分自身への最大の裏切りと言えるのではないのでしょうか。

しかも、見ていると彼らは、しれつとした態度で有権者の前に出てきていささかも恥じないとは、政治家という人種は、いややである！

**彼らに哲学を求める方が間違いかも知れませんが！**

こんな候補者に我々（基礎のしっかりしている）が投票するだけでも、政治家たちは考えているのでしょうか？ 嘗めるのもいい加減にして貰いたい！

もつとも、反対票を投じた議員たちのあつたふりも決してほめられたことではありません。腹を据えて、さつさと自民党と決別すればよいものを、「私が誰よりも自民党を愛している」など女々しいにも程があります。こういうことだから、デタラメ

な小泉に間違つて焦点が当たってしまったのです。（その後一部が新党を結成しましたが、遅きに失した感があります）

さて、ぼくはここで再びもの見方考え方の基礎をしっかりと構築することの大切さを強調したいのです。

というのは、ある本と出会って、そのことを強く感じたからです。ものごとの基礎は、勿論、本だけで築かれるということではありません。が、私たちが偉大な先人の考え方を現代において知ることができるのは本を通してです。

本を通じて先人の様々な考え方に接することで、その助けを借りて、それぞれが自らの内部に基礎を構築していくのだと思います。「古典」と言われる本を読むことの大切さはこんなところにあるのだと思います。

戦後、大学で教養課程が重視され総合的なジャンルをすべての学部が学ばなければならぬとされたのもそのことが大きな理由だったはずで、ところが最近の大学は随分様変わりしてしまつたようですね。「国際関係学部」「人間情報学部」・・・など、ぼくには分けの判らない学部や学科が多いようです。

これは企業の要請によって、企業にとつて、より実用的で役立つための学問を求められた結果なのです。大学でさえも産業界の要請で変質させられてしまったのです。

勿論、大学は専門的な学問や研究の機関であり、教育機関でもあり、そこで求められているのは豊かな人間性（批判精神に富んだ）をもった学生の育成ではないのでしょうか？

かつて「産学共同」などといえば、学生や教授連までが「学問の自由をまもれ！」と真つ先に反対したのですが、いまや、大学の様変わり目は目を覆うばかりですね。

そんな大学出のエリートたちが官僚になり「時の総理にお仕えし」一流企業へ就職して「勝ち組を」を誇っているのですね。

話がまたまたそれますが、テレビを見てみると、昨日まで国会議員や県知事だった人が、落選や引退したと思っていたら、大学教授の肩書きでメディアに出て、しゃべっているのを最近よく見るけれど、そうだよ！元官僚というの中にはいますね。

疑うわけでないけれど、彼らは学問的に優れているのですか？おそらく雇う大学も、彼らのメディアに於ける名前の故に広告塔として雇うのだと思います。大学も今や生き残りの時代なのですから。だけど、学問は派手さとは無縁な存在では無かったのでしょうか？教授にもなれない多くの本当の意味で優れた学問研究の徒はどうなるのですか？

閑話休題

「古典」とは

その一冊とは、今泉吉晴さんの訳したヘンリー・デイヴィッド・ソローの『ウォールデン 森の生活』（1854年 3045円 小学館）です。

先程書いた「古典の大切さ」などはこの本の受け売りなんです。よくはこのソローの『ウォールデン 森の生活』こそ古典の一冊だと考えています。この本はシートンやガンジーやキング牧師など多くの優れたナチュラリストや思想家に影響を与えた一冊でもあります。

ところでソローと言えば、『一市民の反抗 ー良心の声に従う自由と権利』（ヘンリー・デイヴィッド・ソロー・著 山口晃・訳 1575円 文遊社）が最近出ました。

このソローのエッセイは、初めて訳されたという分けではなく既に岩波文庫などでも訳されているのですが、ソロー著ということ、たまたまぼくの目に留まったのです。というのも、6月から7月にかけてピッツボ店内で「3人のナチュラリスト ソロー・シートン・今泉吉晴展」を開催したばかりだったからです。

ソローの時代まだアメリカでは奴隷制が存在していました。

このことに反対だったソローは税金の支払いを拒否し、そのため牢屋に入れられたのです。結果的には友人がその税金を支払ったため、一日で牢からだされたのですがね。

『一市民の反抗』の中で、ソローは政府や軍隊について次のように言っています。

「政府というものは、できるだけ国民に干渉しないほうがいい」「軍隊は政府の腕にすぎません」「政府は国民が自らの意志を實行するために選んだ方法にすぎません」どうですか？衆院選が始まった今、このソローのこんな断片的な言葉を自らの内部で反芻してみると、スッキリと見えてきませんか。

小泉の「郵政民営化による改革のまやかし」や「自衛隊のイラク派遣」がどんな意味なのか！

ところで、ソローの考え方を子どもにも理解できる絵本が出版されています。

福音館書店から今泉さんの訳で出版されている『ヘンリーフィッチバーグへいく』『ヘンリーいえをたてる』『ヘンリーやまにのぼる』（各1260円）の3冊がそれです。この絵本はソローの考えに共鳴したD・B・ジョンソンが描いたものです。

この4月に出された『ヘンリーやまにのぼる』は奴隷制に反対だったソローが税金を払わず、投獄された時のソローの気持ちを描いたもので、肉体は拘束されても人の心は自由であることを描いています。この絵本はソローの考えを子どもに教えることを目的に描かれているばかりではありませぬ。絵本として充分楽しめる内容になっています。

さて、次々権力に取り込まれた「優れた女性」候補が「刺客」として地方に舞い降りていますが、反権力の「優れた女性」候補も次々名乗りをあげないものだろうか、よくは期待しているのです。

ねー、この本読んだ？

物語の本を読む場合、読者にとっての最大の関心は、その先「どうなるのだろうか？」ということだとおもいます。それを知りたい一心で、先へ先へと読み進めていくのです。それが物語の大きな魅力でもあるわけですが。

特に血湧き肉踊るような「ハラハラ、ドキドキ」する冒険小説や推理小説を読んでいる時はその感が強いですね。

たとえば、ベルヌの「二年間の休暇」「海底二万里」（福音館書店）や、「アルセーヌルパン全集」（偕成社）「シャーロックホームズ」シリーズ（岩波少年文庫など）は今でもそのおもしろさが読者を魅了してくれます。

一方、同じ物語でもその先を早く知りたいたと、読み急ぎ（おじさんは、面白かった冒険小説の場合、後でまたゆっくり物語を味わいながら読み直します）するより、たとえば登場人物たちの会話などをじっくり楽しながら読みたい本もありますよね。たとえば「星の王子さま」「くまのプーさん」（岩波書店）や「くまのパディントン」シリーズ（福音館書店）などがそんな本ではないでしょうか。

つい最近読んだ本のなかにも物語のおも

しろさ・豊かさを楽しませてくれた本があります。それを紹介します。

まずは「ハラハラ、ドキドキ」から

『オオカミ族の少年 クロニクル千古の闇1』（ミシェル・ペイヴァー・作 さくまゆみこ・訳 酒井駒子・絵 1890円 評論社）

この物語はいまから6000年前の北西ヨーロッパ



ロッパの森を舞台に展開していきます。少年トラクとオオカミの子ウルフは、父を殺した巨大なクマの姿を

した悪霊と戦うため、精霊の山を探して困難な旅に出ます。途中出会うワタリガラス族に捕らえられるが、そこから脱出し、精霊の山を探す旅に再び出かれます。後を追うワタリガラス族は敵か味方か・・・。6巻の長編ファンタジーの1巻目

『風神秘抄』（萩原規子・作 2625円 徳間書店）

萩原規子の新しいファンタジー。主人公は十六歳の坂東武者の草十郎。彼は平治の乱に破れて源頼朝を守って落ちていく。やがて、それともはぐれ再び京へ、そこで舞姫糸世と出会う。彼の吹く笛と糸世の舞いは不思議な力を発揮する・・・。物語では、も



スと言葉を交わすことができるのである・・・。

次はじっくり味わって読みたいファンタジー『川べのちいさなモグラ紳士』（フィリップ・ピアス・作 猪熊葉子・訳 1890円 岩波書店）



ピアスの動物ファンタジー。主人公の少女ベットと言葉をかわすことができ、モグラは、魔法によって決して死なないモグラでもありました。何百年も

生きているモグラの望みは、魔法を解いて死ぬるようになること。ベットはその魔法を解くことに協力します・・・。ぼくはこのモグラとベットの会話のところがとても好きになりました。物語の豊かさを感じるのです。

編集後記

すみませんでした。200号を出して、気がゆるんだのか、2か月も休刊してしまいました。生来のなまけものゆえ、お許しを！